

江戸時代の八風道

郷土史家 西羽 晃

鈴鹿山脈を横断して伊勢（三重県）と近江（滋賀県）を結ぶ峠道は古代から幾つかあったが、鈴鹿峠を通る道は、江戸時代の東海道であり、当時はもっとも栄えた主要道路であった。脇街道として峠越の道も幾つかあった。うち八風道と千草道は江戸時代以前から商人の道・武士の道として使われた。

慶長5（1600）年、関が原の戦いで勝利した徳川家康は翌6年に本多忠勝に桑名領を支配させ、八風峠・千草峠を桑名藩領に含めた。当時はまだ大坂に豊臣家が居て、対立している時代だから、大坂に対する重要な防衛線として、八風峠・千草峠を家康の有力な部下である本多忠勝に守らせたのである。以後も文政6（1823）年まで桑名藩領として存続した。



現東近江市如来の道標『永源寺町史』（平成14年刊）より

明治時代以前は東海道など主要な街道以外は起終点もルートもはっきり定められているわけではなかった。『菰野町史』（昭和62=1987年刊）によれば、江戸時代の八風道として3つのルートが書かれている。

① 八風峠を越えて、切畑から田光を通り、永井—中野—大矢知—富田へのルートである。文政6年に桑名藩から忍藩へ支配が変わり、大矢知陣屋に置かれたので、忍藩の公的な道として使用された。忍藩領の年貢米はこの道を通り、

富田一色港から船で運び出された。

② 田光から小島―市場―伊坂―柿で東海道に通じた。この道は朝明郡（現在は三重郡）と員弁郡境の丘陵地を通る、高い道なので、「空（そら）の道」とも呼ばれた。

③ 切畑から福王山の麓を通り、田口―田口新田―門前―梅戸―南大社から桑名に至る道である。忍藩領に変わる以前は全て桑名藩領であり、桑名へ行く主要ルートであった。

③については『大安町史』第2巻（平成5=1993年刊）では田光―小島―金井―梅戸―南大社を八風脇街道とし、八風峠と桑名の間である大安町門前に「梅戸番所」が豪族梅戸氏によって建てられたという。番所があったことを示すため「八風街道梅戸番所跡」の石碑が建てられたという。

江戸時代は東海道の鈴鹿峠が整備され、八風越えをする旅人や商人は少なくなり、全国ルートから外れた。しかし地元の人たちの交易の道として使用された。『菰野町史』によれば、天保14（1843）年に、近江黄和田村と伊勢切畑村・田光村の庄屋は証文を取り交わし、荷物の取扱い所を定め、運搬に当たる人足は、この3カ村に限る、としている。田光の旅籠では四日市から来た行商人から干物などを買い入れて、近江へ送っている。

八風峠にまつわる「お菊」の伝説がある。長者の家の下女であった「お菊」が大切な皿を割ってしまったので、彼女は八風峠にある竜神の池に投身自殺してしまった。それ以後、天候が荒れて山崩れ、洪水が続いたので、供養のために祠を建てて、「お菊」の霊を慰めた。その後も陶器を持って峠越えすると、山が荒れると言われ、陶器を持っての峠越えは厳禁された。